

保育者ワークショップ

カラダをひらく コトバをひらく ココロをひらく

～歌う楽しさの原点にあるものは?～

仁愛女子短期大学 講師 増田 翼

◆講座要項掲載内容◆

歌うことが楽しい!と思えるのはどんな瞬間でしょうか? 「こうしなきゃ、あしなきゃ」と音楽の規則を意識するのではなく、自分自身をひらき、自由に様々な想いがあふれ出てくる、これこそ歌が楽しいと思える瞬間ではないでしょうか?今回は、保育現場で歌われることの多い曲をいくつか用意しながら、参加者の皆さん自身がカラダ・コトバ・ココロをひらいて思う存分歌う楽しさを味わっていただければ、と思います。

◆開催期日◆

平成25年11月16日(土) 13:30~15:00

◆開催内容◆

1. はじめに

本来、遊びも学習も自発性あるいは自主性が重要であることはいうまでもありません。自ら考えそれを表現していく、というプロセスを人間は原則的に求めているとも考えられます。ですから当然、「歌う」という行為においても、この点は同様なはずです。ところが、実際の音楽活動(音楽指導)の場面はといえば、「ここはこういう風に歌いましょう」「リズムが違います」など、先生が自らの楽譜解釈をもとに考えを示し自分の思い描く音楽(楽譜に描かれた音楽)に近づけていく、という方法が主流となっています。このような方法は、もちろん「音楽」を学ぶうえでは欠かせないものですが、他方で、子どもにとっては自分の想いとかけ離れた「音楽」になってしまい、楽しさからは遠ざかってしまいます。

余談にはなりますが、上記のようなことを私自身、これまで何度も経験してきました。かつて子どもたち(幼児・小中学生・高校生の合同合唱)に音楽指導をする機会があったのですが、そのときに選曲されたのが「怪獣のバ

ラード」(岡田富美子作詞、東海林修作曲)という歌でした。周知の通り、この曲は細かいリズム感が要求され、またその音一つひとつに歌詞がつけられており、子どもが歌うには難点がいくつもありました。そのため練習は思うように進みませんでした。

ある日、私は発想を変えて「この歌に出てくる怪獣さんでどんなかな?」と子どもたちに尋ねてみることにしました。すると、子どもたちは「メスの怪獣さんを探してるんだ」(あれ?そんな歌だっけ…?)とか「恐竜みたいに緑色でしっぽが長くて…」(そういえばどんな姿か考えたことなかったな…)とか一人ひとり様々な、しかも活き活きとしたイメージを抱いていることが分かりました。そこで、出てきたいくつかのイメージを全員で共有しながら歌ってみると、不思議なことに今まで難しかった箇所もしっかりリズムを刻めるようになったのです。

私はこの経験を通して学びました。自分が抱いているイメージはなんて貧弱なんだろう、と。一人ひとりこんなにも色鮮やかなイメージに沿って歌っているのに、それを無視して、勝手にこちら側の考えを押しつけるやり方は、特に小さい子どもたちには意味がないのかもしれない、と。

それ以来、子どもとの音楽活動の時間には、楽しさから入る音楽指導とは、そしてその具体的な方法とは、という点を念頭に置くようになりました。今回の講座はこのような経験のもとに成り立つものです。では、実際に講座当日に行った内容の一部を以下にご紹介したいと思います。

2. カラダをひらく

「体を楽器のようにして」「体全体を使って歌いましょう」などのいい回しはよく耳にしますが、実際に体を意識し、体の動きを歌に活かすというのは難しいものです。特に子どもと一緒に歌うと、きれいな声(子どもに通やすい声)で歌うことに慣れてしまい、どこに向かって何を伝

えるのか、という実感を交えた声の出し方を忘れてしまいがちです。その結果、歌詞の言葉（音韻）が上滑りした歌になってしまうことも少なくありません。この点について深く考えていただきたいと思い、今回は「うさぎとかめ」（石原和二郎作詞、納所弁次郎作曲）を題材として用意しました（竹内敏晴『教師のためのからだとことば考』筑摩書房、1999年、91-96頁で紹介されているものを参考にしました）。

そもそもたいへん有名な歌ではありますが、この曲を4番まで歌い通す機会はあまりないかもしれません。ぜひ一度、目を通してみてください。するとこの曲は、高慢で落ち着きのないウサギと、ゆったりマイペースなカメの対比が基調になっていることが分かります。さらによく読んでいくと、どうしてカメは敢えてウサギに競争をもちかけたのか、という疑問や、ウサギだけ一人慌てふためいている様子などに気づくことでしょう。



このように歌詞を読み合せていくだけでも面白いのですが、この題材の味噌は、参加者がウサギグループとカメグループに分かれて、実際の役柄を演じるという点にあります。ウサギもカメもお互いに、歌詞を読み解きながら「ああでもないこうでもない」と議論を交わしたうえで、実際に演じながら歌うのです。「この場面のウサギなら、もっと偉そうに腕を組んで歌わないといけなだろう」とか、「カメはあまりウサギのことを気にしてないかもしれない」とか、どんどんイメージが膨らんでいきます。参加者同士の解釈が生まれるわけです。さらにお互いの解釈を表現を通してぶつけ合わせるのです。

もちろん、指導者（伴奏者）も歌い手の気持ちを汲み取らねばならないので、休んではられません。カメグルー



プが低い声色で「むこうのおやまのふもとまで」と歌うならば、伴奏も1オクターブ下げてもよいか、ウサギグループがぴょんぴょん跳ねながらカメグループを罵る場面では、軽快でアクセントの入った伴奏にしようか、などなど。そういった即興で行われる一回限りのやりとりのなかで、お互いの表現を探り合う点に、この題材の楽しさがあります。また楽しさと同時に、歌には必ず方向性があるということをつまみ「カラダをひらく」とは、届けようとするその方向（相手）にしっかりと意識を向けることだという点を、この題材では体験することができます。

3. コトバをひらく

子どもに限らず私たち人間は、歌うとなるとメロディーやリズムに気を取られることが多く、歌詞に対する注意がおざなりになる傾向があります。それはやはり「歌」としての完成を先走るあまりの結果といえるのでしょうか。しかし、歌詞の言葉を大切に、その言葉一つひとつを互いに共有することこそ、歌うことを楽しくする秘訣です。今回の講座のなかでは、「どんな色がすき」（坂田修作詞・作曲）という曲を題材に、この点についても考えてみました。

この歌には、タイトルで問われているように「あか」「あお」「きいろ」「みどり」という四つの色が出てきます。そこで私は、わざと参加者に赤のイメージを尋ねてみました。すると、「明るい」「元気な」「お日様のような」「リンゴみたいな」など様々なイメージがもち上がります。「せっかくなので、実際に元気なイメージで歌ってみましょう」「今度はお日様のイメージで」と次々に提案すると、参加者の歌い方（声質）はイメージごとに明らかに異なるものとなりました。参加者同士が互いの声色を聴き入れながら調整

しているのが分かります。さらに歌った後に、「今のはどう
いう感じがしましたか」と尋ねると、「元気」のときは力強
くなるけれど、「お日様」のときは優しく歌うようになる、な
どイメージに合致する歌い方を一人ひとりが様々に工夫し
ながら表現し、その表現をまた互いに共有している様子
が窺えました。

たしかに音の高さを確認したり、リズムを合わせたりす
る練習方法はごく一般的なものですが、「はいもう一度」
「この音の高さは…」という繰り返しは、練習を単調で
受身的なものにしてしまいます。それよりも、歌詞にうたわ
れている情景をみんなで共有するなどして、歌に自分から
気持ちが込めるような環境構成を心がけることで、何度も
同じ場所を歌っても苦にならず、楽しさを伴った練習が展
開できます。副次的に、他人の声を聴きながら何度も歌う
ことで、自然と音程やリズムも獲得できてしまうのです。

ところで、この曲には「いちばんさきになくなるよあかい
クレヨン」という箇所がありますが、皆さんはどのようなイ
メージでここを歌っているのでしょうか。一番先に赤のクレ
ヨンがなくなって「悲しい」のか、それとも一番先になくな
るから「嬉しい(また新しいのを買ってもらえる)」のか
が、この歌詞を読むだけでは判然としない点にお気づきで
しょうか。実際に歌ってみても、どちらともいえる感じがし
ます。こういう箇所こそ、子どもたちと交流できる大切な場
所になります。私は、もし子どもたちから「悲しい」という
意見が出たならば、伴奏(原曲:ト長調)を「いちばんさき
になくなるよ(C→Cm→G・Bm→Em)」とし、もし「嬉
しい」という意見が出たならば、「いちばんさきになくなる
よ(C→C#dim→G・B→Em)」と弾くなどして、歌い手
の気持ちの後押しをするように工夫したりします(市販さ
れている伴奏用の楽譜は、C→C#dim→G・B→Emで
書かれています)。

本来、言葉には発せられる状況や雰囲気が伴っていま
す。もちろん発する側の感情や意図も含まれています。つ
まり、言葉一つひとつに異なる質感が漂っているはずなの
です。その言葉の集合体が歌になっているのだとすれば、
メロディーやリズムに必要以上に執着するよりも、言葉あ
りきの歌唱指導、すなわち「コトバをひらく」歌唱指導を
目指すべきなのではないでしょうか。



4. さいごに～ココロをひらく～

子どもは、季節に応じた様々な歌をうたいます。その際、
「季節を味わう」ということとともに、子どもにとってみれば、
「季節に対して」歌っているということをおぼえてはいけ
ません。たとえば、「ゆき」(文部省唱歌)という曲を歌う
のであれば、雪「を」歌っていると大人は考えがちです。し
かし子どもは、雪「に」歌っているのかもしれない。それはつまり、
出来事や対象を歌でどう表現するか(大人)ということではなくて、
目の前の相手に歌でどう気持ちを届けるか(子ども)ということ
なのです。だからこそ、子どもの歌には「届け先」が必要になり
ます。届け先が見当たらないのに歌わなければならないから歌う、
というのはやはり少し違うように思います。届ける相手が違え
ば声色が変わるのも当然。歌詞に込める想いの微妙な違いを
しっかり受け止めて、その違いをみんなで確認し合う。そうい
った音楽指導を通じて「ココロをひらく」ことが、とりわけ子
どもとの音楽活動では重要になってくるのではないでしょ
うか。

さて、当日のワークショップにご参加いただいた方々か
らはたくさんのご意見を頂戴しました。なかでも要望とし
てあげられておりました、乳児・年少児向けの音楽活動に
ついて、今後このような機会がありましたら用意してい
きたいと思います。